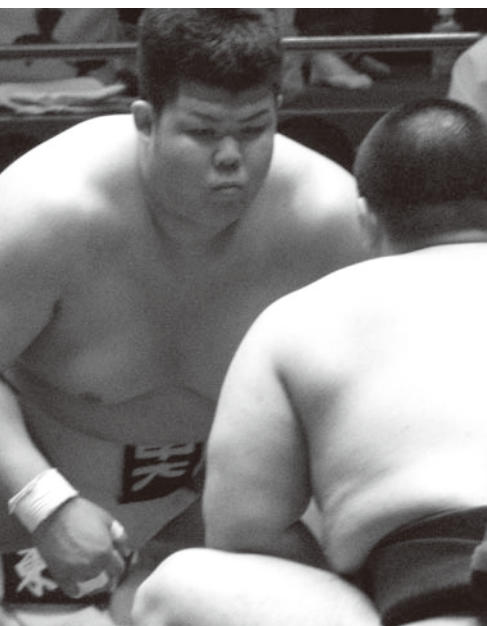


突いて



～学生相撲の東日本選手権個人戦2位
内山翔太選手～



押し

東日本学生相撲選手権大会は6月2日、東京・両国国技館で行われ、中央大学の内山翔太選手(法2、参段=埼玉栄高)が個人戦で準優勝した。決勝では日大4年の工藤豪人選手(四段)に寄り切られたが、自身の個人戦最高成績となり、12月の全日本相撲選手権大会・天皇杯へ弾みをつけた。中大は団体予選を5位で通過し、優秀8大学による団体決勝トーナメントに進んだ。初戦で日大に敗れベスト8に終わった。優勝は日大だった(参加22校)。

内山選手は「くじ運がよかった」と謙遜するが、個人戦参加選手は120人。運だけでは勝ち上がることはできない。181cm、135kgの体がよく動く。大相撲の元千代大海関(現佐ノ山親方)が好きといい、取り口も見習っている。前へ出て突いて押す、速い相撲が身上だ。

1回戦から白星を4つ重ねて入った個人優秀選手8人による決勝トーナメント。2年生は彼を含めて2人、上位段位者、上級生の猛者ばかり。中大からはたった1人の8強入りだ。

土俵下の控え、汗を拭いたバスタオルを四隅をそろえてたたむ。土俵では仕切り前に両手を大きく広げて円を描く。いつものリズムで落ち着いて強豪に向かっていった。

準々決勝で滝田選手(日体大 大将、4年参段)を突き落とし。準決勝でも一瀬選手(日体大、4年四段)を突き落とした。

決勝は午後6時42分から。朝9時に始まった大会を締めくくる大一番だ。吊り屋根が神々しく見える、屋根の下の水引幕もまばゆい。東の花道に中大相撲関係者が勢ぞろいした。熱気を帯びている。2階席向正面では本城亜利架団長率いる中大応援リーダーが「う・ち・や・ま」と連呼する。中大応援席が応援の小旗を振り続ける。

勝負は残念ながら劣勢のまま青房下に寄り切られた。館内に君が代が流れる閉会式、首には銀メダルがあった。「まさかここまで来るとは思わ

なかった。上出来です」

決勝で敗れたことで課題がはっきり見えてきた。指導者の目には「準々決勝から“引き”が目立った」と映った。自らも分かっている。「足がそろそろ、安定していない。四股、すり足をしっかりやります」と前を向く。「立ち会い、鋭く。動きが止まらないように、速い相撲で」。方向性を再確認した。

相撲部のけいこは朝7時に始まる。1時間ほどマシンを使った筋力トレーニングで部位の増強、体力向上を目指す。ベンチプレスで140kgまで挙げられるようになった(一般成人男子の平均は40kg)。授業が終わったあとは夜8時ごろまで約3時間、土俵で汗を流す。「つらいことば



準優勝

かりですが、勝つとつらいことを忘れてしまう、うれしさがあります」

白星をつかみ、表彰式のあの快感を再び味わいたい。閉会式で見て分かった金メダルの輝き。今度は自分が手にすると念じながら、きょうも四股を踏み、すり足を繰り返す。

サッカー少年

相撲との出会いは小学校4年で出場した地元のわんぱく相撲。「熱心にやっていたわけではなかったけれど」。素質を見出されて本格的に取り組んだ。「サッカーも好きで中学3年まで続けていました」。ポジションを尋ねるとほくそ笑んで「トップ下、やっていました」

自らを重ね合わせたのか。日本代表の本田圭佑(CSKAモスクワ)、香川真司(マンチェスターU)ら海外で活躍するスター選手、中大OBでは中村憲剛選手(川崎フロンターレ)の顔が浮かぶチームの要である。



中大相撲部員の精鋭たち。
前列左から、吉本、安田、福井。後列左から、内山、寺田、中嶋、矢後
(写真撮影=中大学生課・山口弘和氏)

中大相撲部メンバー紹介

				cm	kg
先鋒	安田	^{いなさ} 鯨	商3	金足農高	177 135
二陣	内山	翔太	法2	埼玉栄高	181 135
中堅	中嶋	祥悟	法3	弘前実高	185 150
副将	寺田	貴博	法3	東洋大牛久高	178 130
大将	吉本	雄斗	法2	埼玉栄高	178 115
(交代選手)					
	福井	慎太郎	商2	箕島高	180 108
	矢後	太則	法1	埼玉栄高	186 165



マス席で応援 ちょっといい気分

～中大学生課企画「体連応援ツアー」始まる～



学生部事務室学生課では、
体育連盟部会応援ツアーの第1弾として
「中大相撲部応援ツアー」を企画した。
ツアーに参加した学生・留学生約20人が6月2日、
東日本学生相撲選手権大会が行われた
両国国技館を訪れた。

学生記者 佐武祥子(法学部4年)

国技館は知っていても、行ったことはないという学生がほとんどだ。「普段見ることのない」場所に案内してくれるのだから関心は高まり、土俵に近いマス席が用意されたとあっては自然に顔がほころぶ。

参加したきっかけは「友達に誘われて」(大西誓さん=総合政策学部2年)「掲示を見て」(田洋さん=留学生)。相撲については「テレビで少し見るくらいで国技館にも行ったことがなかった。この機会にと思って。実際にナマで見るのは初めて」という理工学部・笠間雄一朗さんの言葉が参加者を代表している。

当初は館内を興味深げに見回していたが、次第に相撲の面白さに惹かれ

ていった。「立ち合いまでの緊張感がいい」(大西さん)「プロと違い団体戦もあるので楽しい」(笠間さん)、「レスリングみたい」(田さん)

2階席には各校の大応援団が陣取っている。「頑張れ中央!」「頑張れ内山!」「頑張れ吉本」。本城亜利架団長は、はかま姿だ。元気のいい中大応援団に呼応して、マス席・応援ツアー席からの声援も大きくなる。大学のプライドをかけた学生相撲ならではの雰囲気だ。

小さい体の選手が、大きな体の選手に立ち向かう。取り組む前は客席にも緊張感が走る。小さくとも全力で、全身で前へ向かっていく姿が相撲の特徴だろう。国技として相撲があるゆえんは、ここ



マス席で、ちょっといい気分

にあるのかもしれない、と私(学生記者)は思う。

「楽しかった、満足した」(王昭雯さん=留学生)。入口近くにあった名物の「やぐら」や「のぼり」が、帰りにはより身近に感じられたようだ。

学生課では、今後も体育連盟部会応援ツアーを開催する予定。C-PLUSや学生課前の掲示をチェックして参加したら、スポーツの新たな一面、面白さがきっと見つかる。

参加者の声

ベトナム・ハノイからやってきた留学生、ラムさん「体が小さい人でも勝てた。大きい人ばかり勝つのではないことを知りました。マワシの色が違って楽しい」(中大は白、日大は黒、日体大はグレーだった)



左がラムさん、右が王姫さん

中国・成都からの留学生、王姫さん

「中国でも相撲のテレビ放送、あります。見たことある。ナマは初めてだった。応援席も面白い。ダイコン持っているのはどこのチーム?」(東京農大です)



応援のCマーク入り小旗

学生課の三輪課長、根本副課長、山口さんらが中大のCマーク入り応援小旗をツアー参加者に手渡していた。その背中に声がかかる。「中大OBです、1本貸してください」。館内では、応援席以外でも中大選手を声援する人が多かった。